

■明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

「助産婦雑誌」編集室

▶ 英語のレーバー (labor) に「労働・仕事」という意味のほかに、「陣痛・産の苦しみ」という意味もあることを医書・看護書の編集にたずさわようになって、はじめて知りました。しかし「産みの苦しみ」には、この症例集特集にも散見されるように愉快的体験、楽しい思い出が伴う場合も多いでしょう。

そういえばミドワイフ (midwife) という英語には「助産婦」という意味のほかに、「事の成立、発起に骨折る産婆役」という意味もあります。ミドワイフの仕事は仲々の重労働ですが「創造の仕事」です。(高橋豊)

▶ 最近感じること。それはドラマはどこにでもあり、どこでも演じられるということです。それが喜劇なのか、悲劇であるのか当人しかわからないのが人生のドラマなのではないかということ。

新しい生命の誕生。これはすべて歓喜に満ちあふれてほしい。長いドラマを演じていくうえにも、不安と喜びがいきみだれるなか、幕があげられるその出発は歓でありたい。そしてその幕がおろされる時は……。

こんなたあいもないことを考えながら、さて自分の生活をかえりみると、マンネリズムの上につかっただけ長い長いドラマに気づかず、(これが当然なのだと思います) 気楽なその他大勢の役者に満足しきっている私をみつけたのです。

(三浦 恵子)

▶ 生命の誕生——生きることの厳しさと、将来への無限の可能性を感じさせる言葉です。以前にいくらか生物学の世界に足を突っこんだことのある私は「生命とは受精とともに誕生するもの、そして出産とは、その生命が生きるための最初の大きな関

門」というような意識があるのですが、一般にはどうなのでしょう。本来なら、ほぼ完全に保護されてしかるべき母体内で、はかなくも消え去る生命、あるいは将来への大きな宿命を担わねばならない生命。人生のドラマがすでにはじまっているといえはそれまででしょうが、せめて第一の関門を抜けるまでは、ハンデなしで生かしてやりたいと思います。(村田 光崇)

▶ ある取材先で。「とりあげババアと呼んで下さい」といってほがらかに笑った若い助産婦さんがいた。

「助産婦ですと自己紹介しても通じない。とりあげババアというとはじめて納得したような顔をする」からだとそうである。

少々オーバーとしても、社会一般の感覚としてはやはり、「とりあげばあさん」は庶民の中に我々と共にあるもの、という印象が強いということであろうか。とすれば現代の助産婦は社会から、少なくともかつての「とりあげばあさん」のイメージを一掃する程までは活躍していない(?) これはゆゆしき問題だ。自らを何と称するかはさておき、要はどれだけケアを受ける人々の中にあるか、であろうから。

悩み、迷い、そして時にはチョッピリ照れながらもなお果敢に情熱をぶつけている。そんな様子がありありとうかがえて、どの症例も感動的であった。なお一層のご活躍を心から祈らずにはいられない。

(森谷 等)

▶ よく私たちは「生まれかわる」などと言ったりします。もちろん実際にそれは不可能なことですし、生まれた時の感覚を覚えている人など誰もいない筈ですが、多分、経験とい

う何とかを通過する仕業の原点が生まれるというところにあるからかも知れません。

誕生がまさに死の通過と引き換えになされる中で、助産婦さん方が瞬時に適切な判断を迫られることを改めて知り、怠惰な自分を再確認した次第です。

さらば、なんじはなんとすると自分に問い返しても何の答もない。ただ、判断への執行は猶予しても、問いかけへのそれは許してはならないなどと思っています。

(須貝 保之)

▶ 当直医のいない静まりかえった分娩室でたったひとり、全神経を集中させながら分娩介助に当たる助産婦——産科医が公立病院からも去りだしてから、こんな状況はごく日常的なことになってきています。ひところ争点となった、医師と助産婦との仕事の違い、などと云ってはおられず今や出産は全面的に助産婦のしかも新しい教育をうけた助産婦の手にゆだねられつつあります。そうして、「お産は病気でないのだから、月がくれば自然に生まれるんだから……」という安易な考え方に、忙しい日本の母親たちは、またぞろ逆もどりしているような気がしてなりません。妊娠中の全期を通じて、指導者としての助産婦の役割が、今ほど期待されている時はないでしょう。それだけに、専門的知識と技術の研鑽はもちろんのこと、母親をとりまく社会を十分認識し、さらにはいかなる種類の母親にも立ち向かえるだけの人生観をしつかり持っていないと大変なことになる、と今さらながら考えさせられた特集でした。それにしても、個人としての助産婦の肩に余りにも多くをかけすぎているのではないかと、産婦の側から国の医療政策に怒りを覚えずにはいられませんでした。(後藤珠真子)